



聞き手

溝瀨 利明
編集委員



(株)タミヤ 代表取締役社長

田宮 俊作

さんに聞きました

TAMIYA Shunsaku



□ 2006年10月13日(金)田宮模型

■ 米国のプラモデルの造形力に唖然

——プラモデルは子どものときに一度はつくる身近なものであり、ものづくりの原点といえます。田宮さんのものづくりへの挑戦は、いつからどのように始まったのですか。

田宮——僕が大学を出たのは1958(昭和33)年です。卒業の直前にお袋に死なれて、うちを継がなければならないというので、すぐに親父の会社に入りました。うちは男7人兄弟。それで最初に言われたのが、「すぐ嫁さんをもらってくれ」でした(笑)。

当時は、木の完成模型全盛時代で、会社ではまず木工機械を動かす

ことから始まりました。木の模型は順調に行き出したのですが、その途端にアメリカからプラモデルが入ってきました。プラモデルは金型をつくってそこに樹脂を流し込みますから、造形力が全然違います。どうしたらこういうものがつくれるのかと、唖然としました。そこで、見様見真似で金型の図面を描いて、アメリカの精密なプラスチックの模型に追いつけ、ということでプラモデルを始めました。しかし当時、日本の工作機械はお粗末でしたし、良いプラスチック原料もありませんでした。そういう面では一から勉強しなければならなかったのですが、それが今では非常に役に立っています。

当時は赤字会社で、僕も入社して4年ほど給料をもらえなかったのですが、熱意だけがありました。

■ 自分が決めた1/35が国際スケールに

——そして“世界のTAMIYA”になっていくわけですが、大きな転機になったのはなんだったのですか。

田宮——転機はミリタリーミニチュアシリーズ(MMシリーズ)です。その前はスロットレーシングカーをつくっていましたが、遊技場で遊ぶものですから、盛り上がり頂点にきたときに、学校が小中学生の入場を禁止したのです。それでブームが去ってしまいました。

私はそれを持ってアメリカへ売込みに行ったのですが、日本製なんて相手にされませんでしたね。それでついでに兵器実験場に入って、戦車の資料を集めました。日本には資料がありませんので、それで戦車の模型を本格的につくり出したのです。取材対象になる戦車の前に行って、簡単にスケッチして、寸法を入れて、それが終わったら写真をバシバシ撮る。楽しかったですね。食事をするのがもったないくらいで、空腹感は全然感じませんでした。1966～67年頃ですから、アメリカでは、ベトナムの反戦気運が出ていまして、アメリカのメーカーはプラモデルでもミリタリーものは開発できなくなっていました。当時プラモデルは1/32のインチスケールでしたが、私が決めた1/35というスケールが、今では国際スケールになっています。もともとは、単2乾電池2本が入る寸法ということで決めたんですけどね(笑)。

最初の頃は、自分で図面を引いて、取扱説明書のイラストもすべて自分で描いていました。戦車の歴史も、洋書から訳しました。夏は明るくなると会社に来て、親父が朝飯と昼飯の弁当を持って、夜もクレーム処理などをやっていたので、10時頃まで会社で仕事をしていました。そういう面では、まったく家庭的な父親ではありませんでしたね(笑)。

■ 原点に立ち返って考えた ミニ四駆

——ミリタリーミニチュアシリーズの後、ミニ四駆がブームになりま

したね。

田宮——F1にしても、戦車にしてもうちの製品は部品が多くて、老眼鏡を掛ける歳になると、自分の会社の模型をつくと、頭が痛くなって、ストレスが溜まるようになった。それで、プラモデルの原点というのは、気楽につくって、捨てても構わないものから始まったのだから、そこに戻ってみようということを始めました。

その頃『4×4MAGAZINE』という実際の四輪駆動車(以下、四駆)の雑誌が出て、だんだん本の売れ行きも伸びていった。そのときに、ラジオコントロールカー(RCカー)を買えない子どもたちに、RCカーの縮小版をつくってみようと思った。それがミニ四駆です。条件はまず四駆であること。それから当時プラモデルの接着剤は、お母さん方に評判が悪かったので、接着剤を使わないこと。部品はほとんどABS樹脂で、バラバラになってもはめればまた元に戻るようにしました。モーターが付いて600円でした。最初のミニ四駆が出てヒットするまで、試行錯誤の時代があって7年かかりました。

■ 子どもたちに つくる楽しさを

——この先、タミヤとしてはどのようなことを考えていますか。

田宮——われわれの業界はどんどんシュリンクしていますから、非常に心配しています。最近の子どもは説明図を読みませんし、自分で組み立てるといふこともしません。今、子どもが楽しいというのは、プラモデルの世界ではなく、コンピュータと



携帯電話です。しかしながら、浜松市美術館でこの夏開いた田宮俊作展では、何十人かを選んで模型を提供し、つくれたらあげる“Make & Take”という催しをしました。これはアメリカのホビーショーでは、とても人気がありました。

最近の子どもは、ドライバーが置いてあっても回し方を知らないし、ニッパーの持ち方も知らない。しかし、教えれば喜んで使うし、工作教室でお父さんが手伝ってやると一生懸命やる。非常にいい風景ですよ。田宮俊作展では、「旦那の目が輝いていて、いつも会社と自分の家を往復している顔とはずいぶん違う。それでプラモデルを再発見した」という女性の方もいましたし、子どもを連れて何回も来てくれた父親もいました。また、5月の連休の6日間、工作教室をやったときには、6日間来て6個持って帰った子もいました(笑)。その子が口コミで友達に言うから、どんどん増える。そういうふうに、子どもたちが楽しんでつくってくれるというのはいいですよ。——今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。